

清水華澄さんと〈第九〉女子会“^{うたげ}歡喜の宴”

清水華澄 × 外園彩香 × 遠藤真理 × 岩佐雅美



左から外園、遠藤、清水、岩佐、小田島。練習所に近い新百合ヶ丘の魚民にて

日本の音楽界の年末の風物詩であるベートーヴェンの〈第九〉。今年読響はイタリア人マエストロ、マッシモ・ザネッティを迎えて全6回の〈第九〉で一年を終える。読響の女性楽団員の皆さんと、声楽ソリストとして公演に参加するメゾ・ソプラノの清水華澄さんに、「オーケストラの中から見た〈第九〉」をたっぷり語っていただいた。

司会・構成／小田島久恵（音楽ライター）

演奏家としての 〈第九〉あるある

——清水さんは熱心な読響ファンでいらっやいますね。

清水華澄（メゾ・ソプラノ）：私がオーケストラの演奏家を尊敬するのは、皆さん3、4歳のころから楽器と向き合っていて、一日何時間も練習して、何年も費やしてこられた方たちだから。私は音楽の勉強を始めたのが遅かったです

し、さらに身体が楽器であるために、その日のコンディションに左右されてしまうことも多く、〈第九〉も周りを感じて音楽を奏でるところまで辿り着くのに時間がかかりました。でも、読響の皆さんはサラッとアンサンブルをやっているのを見て本当にすごいですー！

遠藤真理（チェロ）：歌うのは4楽章ですけど、何楽章から舞台に立ちたいとかありますか？

清水：本当は最初から入りたいんです

が、バリトンの方から「黙れ」と言われてしまいそう（笑）。私はマーラーの交響曲第2番〈復活〉でも第3番でも、オーケストラと一緒にやるときは全部舞台で聴いていたい。〈復活〉は長いから、途中で体が冷えてもぞもぞしちゃうかもしれないけど。実は、オーケストラの練習も見学したいんですよ。どのような流れでやっているのか理解できますし、指揮者の指示の出し方が細かく把握できたりもしますしね。

——〈第九〉はリハーサル日数が短いパターンも多いと聞きます。

遠藤：去年の指揮者のゲツェルさんのときはそうでした。そういうときは、結構緊張します。〈第九〉は慣れているからといって柔軟になれる曲ではなく、基本的には怖いし、やりづらい曲だと思います。

岩佐雅美（ファゴット）：確かに、難しい曲ですよ。初めてのときのほうが、意外と怖いものなしで演奏できてしまう。でも、回数を重ねるごとに怖いところが分かってきますから……。

清水：やり込んで身体に入ってくるといことはあるけれど、たくさん経験すると悪い思い出もくっついてきちゃう。

遠藤：あっ去年……とか、いろいろ思い出しちゃうよね（笑）。良かったことだけ思い出せばいいんですけど。

——〈第九〉は毎年演奏回数も多いですが、演奏家はどう感じているのでしょうか？

岩佐：できれば回数はあまり多くない方がいいです（笑）。やはりベートーヴェンの曲の中でも難しいです。どの曲も大変で



岩佐雅美（ファゴット）

すが、その中でも〈第九〉はかなり大変。その年の公演が7回あるとしたら、楽器のリードは7回もつのかしらとか、やりくりも考えます。そりゃ少ない方が楽ですよ。

清水：毎回違う演奏になるから、その都度反省もすごくされるんでしょうね。読響のお客さんは熱心だから、毎回少しずつ変わるのを楽しみにして、何回も通う方もいそうですね。

外園彩香（ヴァイオリン）：私はあまり経験がないのですが、逆に「今まで何回〈第九〉に出たの？」と聴かれるのが面白くて。まだ数えられるほどしか出てないので、オーケストラの経験を積んでこの曲がどんなふうに分かるのかで成長していくのが楽しみです。

——素敵ですね！ 〈第九〉とともに人生を歩いていく……。読響の「変わった〈第九〉」で思い出したのですが、上岡敏之さんがものすごいテンポで1時間かけずに



清水華澄 (メゾ・ソプラノ)

演奏されたときは、すごいなあと驚いたものです。清水：2015年の〈第九〉はテンポが速い楽団が多かったですね。中でも上岡さんは天才的閃きというか、凡人には見えない景色を見ているというか……（笑）。聴かれたお客様は「楽しかった」と喜ばれていましたが。私はアンサンブルより「個」でいてほしいと言われ、〈ニーベルングの指環の〉ブリュンヒルデのように存在してほしいとアドバイスをいただきました。あと、記憶に残っているのは16年のマルクス・シュテンツさん。ものすごく丁寧に声楽アンサンブルのリハーサルをやってくださって、嬉しかったです。あれくらい熱量を持ってソリスト稽古をしていただくと、マエストロのやりたいことが伝わってきて歌いやすいです。

好きなタイプは？

——なるほど。指揮者もいろいろですね。

ところで唐突なのですが、皆さんにとってベートーヴェンは男性として好きなタイプですか？

遠藤：顔がいかつい印象。あんまり好みじゃない。

清水・岩佐・外園：（笑）

遠藤：コーヒーが好きで、豆をひとつずつ数えて飲んでいたとか……。それを聞いたとき、「めんどくさっ」と思いました。

外園：音楽と人間性を切り離して考えることが多いのですが、好きな作曲家はドヴォルザークとシューベルトなんです。あとシューマン。ベートーヴェンは、楽譜をよく読んで楽譜に書いてあることをきちんと音にするということを大切にしています。あとは室内楽的なことを考えて、周りにアンテナを張って弾こうかなと思っています。

清水・岩佐・遠藤：真面目。

——ドヴォルザークとシューベルトはなぜ好きなのですか？

外園：ドヴォルザークは温かくてほっとする音楽なんです。日本人にとって耳なじみが

いいし。〈ユ



外園彩香 (ヴァイオリン)



遠藤真理 (チェロ)

モレスク〉も好きです。シューベルトは交響曲の他にピアノ三重奏や弦楽三重奏にも凄く素敵な曲があるんです！ 長いフレーズがあっちにいたり、こっちにいたり……しつこい曲ですが、しつこいのが好きなのかも。

遠藤：しつこくした方がいいと思う男性が近づいてくるかもしれないから、あくまで音楽的に、ということだよ（笑）。

外園：音楽的には、ベートーヴェンの〈第九〉は第1楽章の冒頭が好きです。何調なんだろう？ これから何が始まるんだろう？ という期待させてくれる始まり方が素敵。

——遠藤さんは、音楽的にはベートーヴェンはいかがですか？

遠藤：結婚式のときに〈第九〉の第3楽章を使いましたね。

清水：えっ、なんでなんで？

岩佐：私も第3楽章が一番きれいだと思う。どのシーンで使ったの？

遠藤：一番最後のところ。お父さんに手紙を読むシーンね。

岩佐：確かに（笑）。それはお父さんも号泣したでしょうね。

やっぱり一年の締めくくりは〈第九〉で！

——やはり、それぞれに思い入れのある名曲なのですね。

岩佐：一度だけ出なかった年があったのですが、12月に〈第九〉をやらないと「年越し」の感じがしないんです。大変と言いつつ、弾かないで年を終えるのは変な感じがするんですね。

遠藤：大晦日のコバケンさんのベートーヴェン交響曲全曲演奏会を聴いた時は、心から〈第九〉に感動しました。端正な偶数番号、有名な奇数番号のシンフォニーを聴いた後の〈第九〉は、本当に最高でしたね。

外園：私はまだ初心者ですが、5年後にこの曲をどう弾いているのか楽しみです。今とは別の景色が見えてくるように勉強しようと思います。

清水：読響は、ポジティブな人が多いのでサウンドにもそれが表れていますよね。何が好きで何が嫌なのか、演奏を聴いているとよくわかります。正直なオケ。だから楽しいし、聴いていて共感できるんです。

——12月の演奏会を楽しみにしています。

全員：ありがとうございます！